

思　い　出　の　中　の　保　育

(1)

守　永　英　子

うか。M夫が突然、私に問いかけた。

「T夫ちゃんって、いいところあるのかな？」

お話をできないし、かけっこも遅いし……」

決して意地悪な調子ではなく、少しためら
いがちに、疑問を尋ねるという様子であつ
た。私は、咄嗟に返事ができず、言葉をのん
だ。

保育の場で、子どもの言動に驚いたり、困
つて言葉に詰まってしまうことがある。保育
者としての役割をとることが求められる場で
あるから、その役割に適う対応を探さなけれ
ばならない。咄嗟のことだから、その時の
“持っている力”を結集して対処するもの
の、思いは、いつまでも残る。結果が良くて
も悪くても、その時の悩みの深さに応じて、
思いも深く残る。

年長組になつて半ばも過ぎた頃であつたら

T夫は、三歳から入園した子どもである。
ぱちやぱちやした、かわいらしい子で、地面
に腰をおとし、両足を投げ出して、両手で靴

をはく姿は、他の子どもより、一段と幼く、かわいらしかった。言葉も少なく、たどたどしくて、その足りなさを、笑顔で補つていた。年長児にかわいがられたり、同じクラスの女兒が、「T夫ちゃん、かわいい」と言って、世話をやくことはあつたが、対等の友だち関係は、なかなか生まれてこなかつた。

しかし、T夫は、ゆっくりとではあつたが、彼なりに、周囲に关心を拡げ、自分の力を試し、生活を楽しんでいたし、私も、T夫の、ゆっくりとした発達のペースに合わせながら、他の子どもたちに、特別な目でみられることがないように、心を遣つていた。にもかかわらず、そこへ、M夫の、この発言である。年長組になつたM夫が、周囲のこといろいろと気づき、彼なりに、自分の価値感で捉えるようになつたことを、誰が責めることができるだろうか。そこに、T夫が居合わせ

なかつたことが、私にとっては、せめてもの救いであつたし、そのような場面を選んだのは、M夫のたしなみかもしだなかつた。

M夫は、そのくらいの分別のある子どもである。三歳から入園して、ずっとT夫と同じクラスで過ごした。入園当初は、自分から遊ぶことが、なかなかできず、保育者の周辺において、周囲を眺めては、「あの子、あんなことしてゐる。あんなことしちゃいけないんだよね」と同意を求めた。大人の価値感にとらわれていることが感じられた。

M夫の母親は、専門的な職業についていて、子どもに対しても、知的な要求が高いように思われた。幼稚園の生活に関することは、ほとんど、母方の祖母が世話をしていたから、M夫が母親と接する時間は、少なかつたのである。

M夫が、T夫を「お話もできないし、か

けっこも遅い……』と捉えたことは、接する時間の少ないM夫の母親が、『何かができるようになる』という、外側から捉えやすいことに価値をおいていたのではないかと察せられる。

M夫について、保育者としては、大人が外側から与える価値感に縛られずに、内発的なる心の動きに従つた、自由さや、自然さが育つてくることが望ましいと思っていたのであるから、M夫が、心に浮かんだ疑問を、そつと私に表現したことは、否定されるべきことではなかつた。

『そんなこと言わないのよ。人はみんな、いいところがあるんだから』などという月並な言葉では、M夫の眞面目な疑問に答えたことはならない。

では、どうしたら……。私の心は、答えを探して、駆け巡つた。自分から他の子どもに

働きかけることは、あまりなく、誘われるとニコニコと笑顔だけで応じるT夫の顔が浮かんだ。

私は、ゆっくりと、言葉を選びながら、M夫に言つた。『でもね、T夫ちゃんは、一度も、お友だちに、いじわるしたことないのよ』

答えになつたであろうか。私は、自分の中で反芻した。『親切』とか、『人にやさしい』とかいうほどには、T夫は、他の子どもとの触れ合いがなかつた。『いじわるをしない』という表現は、消極的ではあつたが、T夫の状況に、より的確で、子どもにわかりやすい具体的な表現であると思われたからである。

M夫は、納得したのか、何も言わずに、穏やかな表情で、その場を去つた。

束の間の出来事であつたが、強く印象に残ることであつた。『何かがよく出来ることが

よい”という、能力だけから人を評価しようとするM夫の捉え方に、一石を投じることはできたものの、“一人の人間としての尊厳”を感じとつてもらうには、まだ道が遠い。自分

の対応の不充分さと、それを補う手立てが見付からぬままに、忘れられない出来事となつた。

しかし、私の心配をよそに、運動会のリレーで、かけつけの遅いT夫が転んで負けたとき、「T夫ちゃんが悪いんじゃないよね」

と、子どもたちが言つていたと、居合わせた先生が、感動なさつた。うれしいことであつた。

“一人の人間としての尊厳”を大切に思う心は、案外、大上段に構えることから育つではなく、日々の小さな事柄の中で、一人ひとりを大切にする大人に囲まれ、自分自身も尊重されながら育つことから生まれてくるものかも知れない。

(元お茶の水女子大学附属幼稚園)

